

夏場は水管理が重要

～ほうれん草収穫作業～

山形支店管内の厚目内地区では6月末に播種（はしゅ）した二作目のほうれん草の収穫期を7月下旬に迎えました。ほうれん草は暑さに弱いため夏場の栽培が難しいとされていますが、同地区は冷涼な気候により夏も新鮮なほうれん草を栽培できます。

7月29日、ハウス8棟約800坪で栽培している森山茂雄さんは、色濃く育ったほうれん草を収穫し、包装しました。「夏場のほうれん草の栽培は、その年の気温に適した水管理を行わなければ品質が低下してしまうのでとても難しい。品質の良いほうれん草を収穫できるよう、今後も徹底した栽培管理に努めたい」と話しました。

播種作業は、収穫が途切れないように間隔を調整して行っており、今後は3作目のほうれん草の収穫と4回目の播種を行う。収穫は10月いっぱいまで続き、主に県内市場へ1万ケース（1ケース／5kg）程度の出荷を予定します。



ほうれん草を包装する森山さん

生産者が出荷見守る

～ときわにんにく出荷式～

ときわにんにく部会（対馬伸吾部会長）は8月2日、令和3年産「ときわにんにく」の初出荷を記念した出荷式を常盤にんにくセンターで開きました。部会員約50人が参加し、にんにく約1トン（1箱／10kg）の初出荷を見守りました。

同年産ときわにんにくは125人が約80銘柄作付け。小玉傾向でしたが、病害虫の被害は少なく品質の良いものが多くありました。来年6月までの1年間で約400トンの出荷、販売額4億8000万円を目指します。

対馬部会長は「新しいにんにくの出荷が始まり、気持ちが引き締まる思い。近年はにんにくの需要が高まっているので、さらに多くの消費者に食べていただき、知名度向上に努めていきたい」と話しました。

集まった参加者は配送の安全を祈願し、東京の市場に向けて出発したトラックを見送りました。出荷式終了後は目揃え会を開き、部会員らは出荷に向けて規格などを確認しました。

ときわにんにく 

青森県産



トラックへにんにくを積み込む職員